



Title	多宗教による環境保全運動の嚆矢となった「アッシジ会議」：5 大宗教による自然観・人間観の披歴と相互連携の始まり
Author(s)	佐田，喜朗
Citation	宗教と社会貢献. 2022, 12(1), p. 29-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86913
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

多宗教による環境保全運動の嚆矢となった「アッシジ会議」

5 大宗教による自然観・人間観の披歴と相互連携の始まり

佐田喜朗*

“Assisi Conference” which became the beginning of the
environmental conservation movement by multiple religions

Declarations of the views of nature and human beings by the five major
religions and the beginning of mutual communication

SADA Yoshiro

1. はじめに

地球温暖化をはじめとする地球環境問題が人類にとって最大の問題の一つとなっている今日、世界の宗教界はどのような関わりを持とうとしているのか。

もちろん、宗教の中には仏教、ヒンドゥー教、道教、神道といった元来自然との親和性を持ち、環境破壊というより自然保護に近い教義と実践の伝統を有するものもある。

また一方で、キリスト教のように、産業革命以来の環境汚染、環境破壊のいわばマイナ斯的な立役者として非難されるものもある。キリスト教については、しばしば話題にあがる米国の歴史学者リン・ホワイト・ジュニアが1967年に著した『現代の生態学危機の歴史的根源』における、キリスト教こそ環境問題の元凶であるとの痛烈な批判が知られている。

また、ユダヤ教も旧約聖書の創世記における自然に対する人間の“支配”を聖典の一部とする立場から、一口にユダヤ・キリスト教文化として同様の

* 國學院大學大学院文学研究科神道学・宗教学専攻博士後期課程

批判を受けることもある。

では実際には宗教界による環境保全運動はどれくらい行われているのか。正式なデータはないが、世界の宗教による自然環境保全プロジェクトの振興を 1995 年から 2019 年までの 23 年間に渡って支援してきた英国に本部を置く非営利団体「世界宗教環境保全同盟」(Alliance of Religions and Conservation 以下 ARC) の事務総長を務めたマーティン・パーマーによれば、1985 年には世界で 3 件しか見られなかった宗教ベースの環境保全プロジェクトは現在では 100 万件を超えるとしている。⁽¹⁾

地球温暖化をはじめとする環境問題の解決については、国連がけん引役となって国連持続可能な開発計画 (以下 SDGs) を掲げ、2030 年までの達成に向けて、政治、経済、科学、人文その他の世界のあらゆる分野において積極的な参画を呼び掛けている。

そうした中、宗教界も 2009 年に国連開発計画 (UNDP) との国際会議を上記 ARC 主催で開催し、世界の 10 宗教 50 教派以上が地球温暖化対策に関する長期計画を立案して取り組みを開始したりしている。

また同じく国連機関である、国連環境計画 (UNEP) に 2008 年に設けられたフェイス・フォー・アース・イニシアティブ (Faith for Earth Initiative) という異宗教間の対話・理解を促す機関は、歴史ある世界宗教会議らと共同で SDGs の目標達成に向かう行動をフェイス・アクション・オン・ザ・ユース・サステナブル・デベロプメント・ゴールズ (Faith Action on the UN Sustainable Development Goals) として 2021 年 9 月から開始するなどしている。

このように現在では、世界のさまざまな宗教が自然環境保全活動を行っているが、そのもっとも直接的なきっかけとなり、世界の宗教界による環境保全運動に特化した取り組みの嚆矢は、1986 年、国際動物愛護団体として知られる世界自然保護基金 (Worldwide Fund for Nature 以下 WWF) の主催により、イタリアのアッシジで開催された 5 大宗教 (仏教、キリスト教、ヒンドゥー教、イスラム教、ユダヤ教) の代表者によるアッシジ会議であると言われる [Grim&Tucker2014: 160]。

アッシジ会議の正式名称は、Religion and Nature Interfaith Ceremony as part of the WWF 25th Anniversary (WWF 創設 25 周年の一環としての宗教と自然に関する多宗教間行事 著者訳) であるが、通常アッシジ会議と呼ばれてい

るため本稿でもアッシジ会議としたい。

本稿では、後の ARC の発足につながり、地球環境保全に関する異宗教間ネットワークの嚆矢となった WWF インターナショナル主催のアッシジ会議についてその内容と意義についての考察を試みたい。

2. アッシジ会議開催の経緯とその内容

世界の 5 大宗教が環境保全をテーマに初めて語り合いをもったアッシジ会議は、WWF の創立 25 周年を記念して、1986 年 9 月 25 日から 29 日までの 5 日間にわたって 5 大宗教の代表者および各宗教の祭事および音楽関係者、WWF その他の環境保全団体関係の学者ら約 800 人が集って、キリスト教における“自然環境保護の聖人”といわれる聖フランチェスコ (1181-1226) の活動拠点であったアッシジで開催された。

世界最大の国際自然保護団体といわれる WWF が、なぜ宗教界の代表者を集めた環境保全会議を開催したのか。その理由について、当時 WWF の世界総裁であり、会議の発案者でもあった現エリザベス女王の夫君である故エジンバラ公フィリップ殿下は、後年 ARC 事務局によるインタビューの中で次のように語っている。

1980 年代、WWF インターナショナルは、資金調達、自然保護プロジェクトの開発、一般大衆への教育という 3 つのことを世界中で行おうとしていました。最初の 2 つは問題ありませんでしたが、最後の 1 つはとても困難でした。私たちが記事や講義、本や映画などを通じて行っていた教育事業は、教育を受けた人々にしか届かず、おそらく多くの国の中産階級にしか届かなかったと私は主張しました。私たちが到達する必要があったのは、最もリスクの高い地域、そして生物多様性の可能性が最も高い地域に住んでいる人々でした。そこで私は、彼らと最も容易にコミュニケーションをとることができるのは彼らの宗教指導者であると思いました。彼らは他の誰よりも当該地域の人々と連携を取り合っています。ですから、地元の宗教指導者たちに環境に対する彼らの責任を認めてもらうことができれば、彼らはその責任を彼らの信徒に伝えることができると思ったのです。

以上のように WWF は、自然保護運動が実際の現場における人々の行動変容に至らないという問題を抱えた中で、行動変容を促す力があるのは、その地域の宗教指導者であるとの視点から、WWF 発足 25 周年の記念行事として世界の主な宗教を招いた会議を開催した。

この時点では、仏教、キリスト教、ヒンドゥー教、イスラム教、ユダヤ教の 5 つの宗教が正式メンバーとして参加し、それぞれの代表者を派遣した。

また、正式メンバーではなかったが、ゾロアスター教、ジャイナ教、シク教、バハイ教、道教、マオリ先住民の代表らも参加した。

これらの宗教の代表者を集めること、また、自然環境保全をテーマに集めることは、決して容易ではなかった。その実際の仕事を請け負ったマーティン・パーマーは、当時英国の非営利団体インターナショナル・コンサルシー・オン・レリジョン・エジュケーション・アンド・カルチャー（International Consultancy on Religion, Education and Culture）という宗教・教育・文化に関するコンサルタント団体を主宰していたが、その苦労を次ように述べている。

その時点では、ダライラマ殿下以外には宗教と自然に関する正式文書を作成した宗教はありませんでした。私はフィリップ殿下の指示で 5 宗教の多くの指導者を訪問し、それらの中で宗教宣言を書いてもよいという人を見つけるまで訪ねました。困難であったのは、誰も今までにこのようなことを行っていなかったことで、そのため私たちは一生けん命、5 宗教の指導者たちに、彼らに望まれていることは何かを理解してもらうことに苦労しました。特に、イスラム教とユダヤ教の参加者に対しては、会議期間中に彼らの宗教生活に即した食事を提供すること、そして何より、この会議に参加することに対する外部からの批判に対して彼らの尊厳を維持することに気を配りました⁽²⁾

実際、アッシジ会議の参加者は、会議の前日にバチカン市国を訪問し、そこで当時のローマ教皇とも謁見したが、当時ローマ教皇庁は、イスラエルの建国をいまだ公認していない時期であり、ユダヤ教の代表者を受け入れたこと自体も異例の対応であったと、当時学識者の一人として参加したマイケル・シャックルトンは語っている。⁽³⁾

シャックルトンによれば、中東におけるイスラエルと周辺諸国との陰悪

な関係が続くなか、また、バチカンのイスラエルに対する外交姿勢の中、さらには道教は中国が共産国ゆえに海外渡航が厳しい事情の中でこれだけの人が集えたことは異例だと感じたという。

シャックルトンは、テーマが政治的なものではなく、環境問題であったことが幸いしたと感じたという。

4 日間にわたる会議は、互いの宗教を尊重しあうことを前提としつつ、各宗教における自然観、人間と自然との関係、環境保全に対する思い、また、現状における活動状況を披歴しあったばかりではなく、お互いの自然に関する祭事、祈り、芸術、音楽等を披歴しあった。

シャックルトンによれば、最終日までの丸三日間は、各宗教の音楽や舞踊を野外で楽しむなどの心和む数々のイベントがあり、それらを共に経験して過ごすなかで、参加者間に、一種の友愛の情が醸し出されていったという。また、日を追うごとに環境保全を共に進めようという仲間意識が醸成されていったという。

また、宗教以外の団体として参加した WWF および国連の関係者は、環境保全に関して宗教者は科学的な知識がないから我々が宗教者に教えてあげなければならないという一種の上から目線、また宗教者は宗教者で我々は科学者に教えられなくてもわかっているといった反応を当初はみせていたが、日にちを重ねる中で、双方の知識や考え方を謙虚に学ぶ姿勢が見えるようになり、科学と宗教との理解を深めるという意味でもアッシジの記した軌跡は後世の運動に寄与するものであったと感じたという。

アッシジ会議は、最終日に 5 宗教がそれぞれの宗教における自然観、自然と人間との関係、環境保全の重要性と人間の役割といった内容を含むアッシジ宣言を表明して、互いに同じ WWF の宗教ネットワークの一員として継続的に連携を取りあうこと等を確認して幕を閉じた。

こうしてアッシジ宣言は、5 大宗教による生態学と自然の問題に関する (on the issue of ecology and of nature) 初の公式見解となった。

ただし、公式見解といっても、宗教によっては宗派が多数あり、宗教全体を代表する組織を持たないものも多く、また同じ宗教内においても思想に隔たりがあることは容易に想像される。したがってここでは、アッシジ宣言における各宗教の環境保全への決意の内容を紹介するとともに、それが各宗教の自然と人間に関する教義、思想の特徴を包括的に表しているかにつ

いて、他の研究者らの見解を添えた少々の検証を試みつつ、確認していくこととしたい。

なお、アッシジ会議をまとめた書籍 *Faith and Nature* において宣言文は宗教名の英語頭文字のアルファベット順に掲載されていることから、本稿もそれに準じて仏教 (Buddhism)、キリスト教 (Christianity)、ヒンドゥー教 (Hinduism)、イスラム教 (Islam)、ユダヤ教 (Judaism) の順で進めたい。

3. アッシジ宣言

各宗教のアッシジ宣言は、英文で 5000 字から 7000 字程度の長さのものであり、さほど長文ではないため全文を紹介したいところではあるが、ここでは要点と思われる内容を中心に掲載する。なお原本は英文であり訳本もないため、翻訳については筆者によるものであることをご容赦願いたい。また、宣言の抜粋は ARC のウェブサイトのおよび上記 *Faith and Nature* から抜粋したものである。

(1) 自然に関する仏教徒宣言 (The Buddhist Declaration on Nature)

仏教による宣言は、インド北部にあるチベット仏教のダライラマの亡命地であるダラムサラーにあるギュト・タントリック大学の僧院長、ルングリグ・ナムギャル・リンポチェによって発表された。

その内容の抜粋は以下のとおりである。なお、仏教以外の宣言の抜粋についても同様の在り方で紹介する。

物質界では原因とそのために生じる結果との間に自然な関係がある。動物を含む衆生の生活においても、幸福をもたらすポジティブな原因とネガティブな結果をもたらすネガティブな行動には同様の関係がある。

したがって、健康的で前向きな態度で動機付けられた人間の事業は、幸福の最も重要な原因の 1 つであり、無知と否定的な態度によって生み出された事業は、苦しみと悲慘さをもたらす。そして、この前向きな人間の態度は、最終的な分析では、すべての衆生に光と幸福をもたらす

ことを目指す、本物の利己的でない思いやりと愛情深い親切心に根ざしている。したがって、仏教は愛、理解、思いやりの宗教であり、非暴力の理想に向かって取り組んでいる。このように、それはまた、野生生物とこの世界のすべての存在が生存のために依存している環境の保護を非常に重要視している。

(中略)

私たちは、私たちの生存を、否定できない権利と見なしている。この惑星の同居人として、他の種もこの生存権を持っている。そして、人間や他の人間以外の衆生は、生命と幸福の究極の源として環境に依存している。環境の保全、過去の過失によって引き起こされた不均衡の回復という信念を共有しよう、勇気と決意を持って実施しよう。(中略)

私たちの祖先は、私たちに天然資源が豊富で私たちのニーズを満たすことができる世界を残した。これは事実である。地球の天然資源は、どれだけ利用されても無制限であると過去に信じられていた。しかし、私たちは今日、これらの資源を理解し、注意を払わなければ、無尽蔵ではないことを知っている。

(中略)

この世代が重要な岐路に立っていることは明らかである。(中略)

将来の世代が動物の自然の生息地を知らないという大きな危惧がある。彼らは、現代の私たちが絶滅の危機に瀕していると知っている森林や動物の存在さえ知らないかもしれない。私たちは大きな危険を意識する世代である。手遅れになる前に、私たちが責任と具体的な行動を起こす能力を持っている。

以上の仏教の宣言文では、最初に縁起説の基本原則を説き、仏教は愛と慈悲の宗教であり、環境重視であり、人間のみならず全ての種は生存権を有すること、そのために過去の過失によって引き起こされた不均衡を回復することの必要性を呼び掛けている。

さらに、天然資源は有限であるとの事実に触れ、手遅れにならないうちに行動を起こすよう呼び掛けている。

仏教における自然環境保全に対する見解については、未だ十分な先行研究の調査ができておらず、管見のかぎりにおいては、『諸宗教の倫理学（第

5 卷) ——環境の倫理』においてヘヨ・E・ハーマー、ライナー・ノイの見解がある。

彼らによれば、仏教においては、仏教諸派は、実在についての共通の見解をもたいがゆえに、環境に対する統一的な理解と態度を持たないとしながらも、大きくは小乗（ヒーナヤーナ）と大乘（マハーヤーナ）のそれぞれにおける自然環境に関する解釈を示している。

それによれば、小乗における環境としては、縁起説に言及しながら「仏教徒は、生態学の現代の認識、すなわちすべての環境要因が相互に影響し合い、それと結びついて環境の因果過程が形成されるという認識によって、この洞察が確かめられたと感じている」〔クレッカー、トゥヴォルシュカ 1999(1986): 98〕としている。

また、慈悲に関する小乗的解釈として「慈悲の戒律から殺すことの禁止が生じる。この禁止は動物にも苦しみを与えてはならないから菜食によって栄養をとるという要求を含む（中略）慈悲と慈愛は動物の生に対する配慮を明確な仕方を含んでいる」〔クレッカー、トゥヴォルシュカ 1999(1986): 103〕として、さらには、「人は慈悲と慈愛の仏教倫理に自らの方位を定めれば定めるほど人間と自然のための共通の存在条件はますます良くなり、人間の環境に対する関係はより和やかなものになるであろう。慈愛と慈悲はすべての生きもののためになる」〔クレッカー、トゥヴォルシュカ 1999(1986): 103-104〕として、慈悲と慈愛の倫理が環境への配慮を命じているとしている。

また同じくハーマーらは、大乘的な観点からみる環境についても言及し、大乘は小乗の知を前提としつつも、「ブッダを絶対的存在に高め、ブッダを万有並びに自我と同一視し、そのことによって仏教教説を宇宙的なものに向けるという独自の仏教学が発展した。こうした展望に基づいて、大乘では小乗よりも明確に環境を視野に入れているということが期待される」〔クレッカー、トゥヴォルシュカ 1999(1986): 104-105〕としている。

そして「すべての存在者はブッダの本性が与えられ、ブッダになりうる。（中略）この見地からブッダは環境の要素の化身と、みなされうる（中略）空、真如、ブッダの本性が生命のある、さらには生命のない一切の環境諸要因の実際の本性を言い表しているとすれば、仏教徒にとって、環境は自らの姿と同じように彼と親密な関係にあるということになる。」〔クレッカー、ト

ウヴォルシュカ 1999(1986): 108-109] と、大乘における環境保全への関心の必然性を述べている。

また、溝口次夫は、リチャード・ワイスバードとの編著『環境と宗教』の中で、「仏教は東アジア、東南アジアで信仰されている。これらの地域は、自然に恵まれた農耕生活を中心とする豊かなところであり、自然を愛し、自然と共に人があるという共生（ともいき）思想が教えの基本である」[溝口ワイスバード編 2006: 38] として仏教と自然環境保全との必然的な関わりに言及している。

また同じく同書の中で、高橋憲昭は、「仏教には本来、人間を取り巻くあらゆるものに人手を加えず、あるがままに捉えていこうとする考え方がある。そこには人間とそれらのものとは一体であるとする姿勢があり、また、万物に生命を認める立場とも繋がっていく。このように考えると、本来、仏教の教えには自然を人間と対立する存在と見て、それを人間のために利用し開発するといった姿勢はでてこないのである。しかし、現実には、世界の仏教圏においても、自然観を異にするキリスト教圏と同じく自然に手を加え、無制限な開発をすることによって環境破壊が進んでいる。」[溝口 ワイスバード編 2006: 5-6] と述べている。

アッシジ宣言の背景となる仏教思想について少し補足する意味から、他の研究者の見解を紹介したが、いずれにしても、こうした研究者らの見解とも矛盾しない見解がアッシジで発せられたと言えよう。

(2) 自然に関するキリスト教徒宣言 (The Christian Declaration on Nature)

キリスト教の宣言は、カトリックを代表する修道会の一つで、聖フランチェスコを創立者とする聖フランシスコ修道会の会長であるランフランコ・セリーニ神父によってなされた。

神は、何もないところから、自由に、彼の言葉によって、この世に存在するすべてのものを創造された。彼だけが完全に特別で、超越的で不変であるのに対し、すべての生き物は偶発的で、可変であり、その存在を完全に彼に依存している。いかなる生き物も、彼の性質の一部または彼の存在の“火花”であると主張することはできない。しかし、その創

造された起源ゆえに、それぞれがその種に応じて、そして宇宙の調和のとれた統一の中ですべてが共に、神の無限の真実と美しさ、愛と善、知恵と威厳、栄光と力を示している。

神はすべてが良くあれと宣言された、そして確かに、すべてがとても良きものとなった。神は不必要なものは何も創らず、必要なものを何も省略していない。こうして、宇宙のさまざまな要素が相互に対立している中であっても、生き物は創造主の意志によって存在様式を受け取っているがゆえに、神の意志の調和が存在する。そしてその目的は、相互依存を通じて天地万物の美しさを完璧にすることである。創造主に栄光を与えるのは、人間の都合や不便に関係なく、万物に込められた本質そのものである。

(中略)

人間の支配は、神が彼の栄光を明らかにするために作られたものを虐待、損ない、浪費、または破壊する許諾として理解して良いはずはない。その支配は、すべての生き物と共生する財産管理職 (stewardship) 以外の何物でもあり得ない。人間の立場は、一つには神との総督的な共同の立場に近づこうとしているが、その一方では、天地万物との共生における神自身の優越性は、人および財産管理職としての人の立場、またすべての創造物に対する神の唯一絶対的な支配を示さなければならない。自分自身を破壊する危険を冒して、人は混乱や無秩序に陥ってはならない、ましてや神の豊かな宝物を破壊してはならない。

生き物に対する人間のあらゆる無責任な行為は忌まわしいものである。その重大さは、それは天地万物の相互依存する調和を維持し、目的を与える神の知恵に対する犯罪である。

キリスト教の宣言では、はじめに万物が神による創造物であり、この世に何一つとして不必要なものはなく、すべてのものが調和された姿こそ本来の姿であるとのべている。

また人間による“支配”とある聖書の創世記の前述の文言は、決して自然界への虐待や破壊を意味するものではなく、健全な“管理”への信託であるとしている。

しかし、現実をみると、今日までの歴史の中で生態系の破壊の元凶はキリ

スト教にあるとする批判がある。

田村光三によれば、各所でしばしば引き合いに出される事例として、1967年にアメリカの歴史学者リン・ホワイト・ジュニアが、科学雑誌 *Science* に掲載した『現代の生態学危機の歴史的根源』という論文において、「現代我々人類が直面している生態学的危機は、近代の科学・技術によってもたらされたものである。そして、その近代・技術を生み、育て、発展させたのはキリスト教である。それゆえに、現代の危機の元凶は西欧的キリスト教にほかならない、というものであった」[田村 1997: 482-483] を上げている。

米国イエール大学教授でイエール・フォーラム・オン・レリジョンズ・アンド・エコロジー (Yale Forum on Religions and Ecology) という宗教と環境保全に関する学術ネットワークを 1998 年以来主宰するメリー・エブリン・タッカー (Mary Evelyn Tucker) は、ジョン・グリム (John Grim) との共著 *Ecology and Religion* の中で、ホワイトは、神学者や聖書学専門家たちに宗教と環境の危機との関係を探求することを呼び掛けたと評している。

タッカーは、「この著作によってホワイトは、(技術の進歩が生態系に悪影響を及ぼした) 原因の一部分は、自然から隔離した超越的存在としての神の強調をとまなう人間中心思想の強いキリスト教の影響によるとしている。彼は、こうした考え方が、自然の非神聖化を大きく進め、その結果として自然を見境なく搾取することの容認につながったとしている。ホワイトは、キリスト教の中でも正教会や、彼が自然を守る聖人として取り上げたアッシジの聖フランチェスコにみられるようなあり方を推奨した。彼は後年の著作の中で、人間と自然がより同等に関わり合う新たな基盤としてスピリチュアル・デモクラシーを提案した。」[Grim&Tucker2014: 57] と述べ、ホワイトが自然に対する聖なるものとしての見方を離れたあり方を非難するとともに、代替案として同じキリスト教の中でも正教会や個人としての聖フランチェスコへの共感を呼び掛けたことを述べている。

ホワイトは、原文において「異教のアニミズムを打破する過程において、キリスト教は、自然界の事物の感情に無関心な姿勢で搾取することを可能にした」[Spring and Spring (eds.) 1974 : 15] と、キリスト教による汎神論の打破という布教姿勢が自然界への無関心と搾取につながったことをのべている。

ここで一言、正教会の自然観について言及する必要があると思う。なぜな

ら正教会においては、カトリックやプロテスタント教会とも異なり、自然を神聖視する思想が一貫している。このことについて、上記タッカーは *Ecology and Religion* の中で、「東方正教会においては、神学と礼拝において、人が宇宙の無限さと美しさに関心を持つように導いている。感覚をともなう物質世界との関わりの中で、この伝統宗派は、信徒を四季のみずみずしさや日常のパンの味の中に込められた宇宙的な精神性に導いている」〔Grim&Tucker2014: 91〕と述べている。

また、キリスト教における自然についての聖書理解に関する歴史的な反省として、最も明確に語られているものの一つとしては、現ローマ教皇フランシスが、環境保全に関する初の回勅『ラウダート・シ』のなかでのべている次の言葉が理解しやすい。

教皇は、「わたしたちキリスト者が、時に聖書を誤って解釈したのは事実ですが、今日ではわたしが、神にかたどって創造され、大地への支配権を与えられたことが、他の被造物への専横な抑圧の支配を正当化するとの見解は断固退けなければなりません」〔教皇フランシスコ 2016: 62〕と、表現している。

アッシジ宣言は、キリスト教の自然保護に関する見解の嚆矢とされるが、『ラウダート・シ』にみられるような、後の公式見解とも矛盾しない解釈が宣言されていたと言えよう。

しかし、ここで第一番目に取り上げた仏教の宣言と比較すると、あくまで自然を管理するのは人間であるとする、ある種の人間中心主義が息づいていることにも気づく。

(3) 自然に関するヒンドゥー教徒宣言 (The Hindu Declaration on Nature)

ヒンドゥー教の宣言は、インドにおける政治家であると同時にヒンドゥー教およびサンスクリット学者として知られるカラン・シン博士によってなされた。

ヒンドゥー教は、段階的な進化のスケールで現れる神の包括的な主権を信じている。人類は、現在、進化のピラミッドの頂点にあるが、地球とその多種多様な生命体とかけ離れたものとは見なされていない。

(中略)

ヴェーダだけでなく、ウパニシャッド、プラーナ、それに続くテキストなどの後の経典においても、ヒンドゥーの自然に対する見方が明確に示されている。自然への畏敬の念と、自然の偉大な力―地球、空、空気、水と火―そして植物や木、森や動物を含むさまざまな生命の秩序が、自然の素晴らしいリズムの中で互いに結びついているという認識が行き渡っている。神は創造の外面ではなく、自然現象を通して自らを表現している。したがって、ムンダカ・ウパニシャッド(Mundaka Upanishad)では、神は次のように説明されている。

火は神の頭であり、その目は月と太陽である。宇宙の領域は彼の耳であり、彼の声はヴェーダに明らかにされている。風は彼の息であり、彼の心は宇宙全体であり、地球は彼の足台であり、彼は正にすべての内なる魂である。

(中略)

今日必要なのは、人類が自然を破壊することは、最終的に自らを破壊することであるということを心に刻むことである。

(中略)

何世紀にもわたる環境の猛烈な搾取がついに我々を捉え、自然に対する根本的に変化した態度は今や精神的な利益や軽蔑といった問題ではなく、まさに我々の生存そのものに関わる問題となった。この地球は、ヒンドゥー教徒の見解では普遍的な母としてとても感動的に見られており、原始の海の段階から何十億年もの間をかけて人類を育ててきた。現在の破壊への地滑りを止め、すべての生命に対する古代からの畏敬の念の伝統を再発見し、手遅れになる前に、私たちが向かっている自殺の道を逆転させる決意を宣言しよう。

このヒンドゥー教の宣言では、ヒンドゥー教の自然観が、自然への畏敬の念にもとづいていること、また、万物が互いに結び付いていること、したがって自然を守ることは当然であり、人類にとって自然を搾取し破壊することは、自らを破壊することになるとしている。

そして、全ての生命に対する古代からの畏敬の念を再発見して自然破壊をただちに止めることを強く訴えている。

ヒンドゥー教における自然への畏敬の念の存在については、ヒンドゥー教が典型的な多神教であることから容易に想像できる。

例えばヒマラヤ山脈を水源としインド北部を流れるヤムナ川は女神と一体化した存在として知られる。ヤムナ川信仰について、前記タッカーは、ヤムナ川上流の巡礼地について「巡礼者たちは、この温泉に浸かることによって、母としてのイメージをとおしてヤムナ女神と親しく交わることを願う。（中略）女神は川と一体化したものであり、川そのものが神聖なるものである」[Grim&Tucker2014: 145]と述べているようにである。

ヒンドゥー教における自然と人間との関係について、アルフォンス・ヴァン・ディユクは、「ヒンドゥー教は人間と環境について語るのではなく、人間がその一部として生きている世界、あるいは宇宙について語る。ヒンドゥーの宇宙論にはまた、ユダヤ・キリスト教の伝統である、地上支配権の思想はない。人間は被造物の領域で最高の存在者ではない」[クレッカー、トゥヴォルシュカ 1999: 139]として人間も自然界の一部であるとの認識を示している。

『世界宗教百科事典』によるとヒンドゥー教は多神教であるがその本質はシャクティと呼ばれる力にあるとしているとして次のように記述している。

ヒンドゥー教は典型的な多神教といえるが、その本質はシャクティとよばれる力である。これが具現化してさまざまな神のかたちをとる。そこからさらに特定の神を主神あるいは選択神として信仰する宗派が日々生まれた。[世界宗教百科事典編集委員会編 2012: 484-485]

ヒンドゥー教は、万物は見えない大きな力の発現であり、全てがその力によっていわば結ばれた存在であるとの世界観に立っていることについて国連環境計画と世界最大の多宗教間ネットワークである万国宗教会議（Parliament of the World's Religions）で2008年よりスタートしたフェイス・フォー・アース・イニシアティブの紹介冊子によれば「ヴェーダの中のみならず、後のウパニシャッド、プラーナその他の聖典においても、ヒンドゥーの自然に対する視点は明確に示されている。それらの中には一貫して生命への敬い、偉大な自然界の力すなわち地球、天空、空気、水、火、また樹木、動物すべてが互いに自然の偉大なリズムのなかで結ばれていることへの認

識が浸透している。聖なるものは創造物の外にあるものではなく、自然現象をとおして自らを表現しているのである。」[UNEP Parliament of the World's Religions 2010:44] と、人を含む自然界と聖なるものとの一体性をのべており、アッシジ宣言は、ヒンドゥー教の自然観の核心部分を表現して間違いないものであることがうかがえる。

(4) 自然に関するイスラム教徒宣言 (The Islamic Declaration on Nature)

イスラム教の宣言は、サウジアラビアのイスラム教の巡礼地マッカ（メッカ）に本拠点を置くイスラム国際非営利団体 Muslim World League（ムスリム世界連盟）の事務局長アブドラ・オマール・ナシーフ氏によってなされた。

イスラム教の教えの本質は、宇宙全体が神の創造物であるということである。アッラーは水を地球に流し、天を支え、雨を降らせ、昼と夜の境界を保つ。豊かで素晴らしい宇宙全体は、その創造者である神に属している。植物も動物も一対で創造し、増殖させる手段を与えたのは神である。それから神は人類という特別な創造物を成した。なぜなら人類だけが理性と考える力、そして彼の創造主に背を向ける手段でさえもつ存在として創造されたからである。

人類は、天使よりも高い位を獲得するか、その逆に最低な獣よりも低く沈む可能性を有している。

（中略）

イスラム教徒にとって、地球上での人類の役割は、ハリファ（khalifa）すなわち副摂政、神の受託者である。私たちは神の命による地球上の財産管理人（stewards）であり代理人（agents）である。私たちはこの地球の支配者ではない。地球は、私たちが好き勝手に何を行ってもよいわけではない。地球は神のものであり、神は私たちにその管理を任せてくださった。神の副摂政、ハリファとしての私たちの役目は、神の信託に応えることだけである。

（中略）

イスラムの中心的概念はタウヒード（tawheed）または神の統一（unity）である。アッラーは統一の存在である。そして彼の統一は人類

の統一、また人と自然の統一にも反映されている。彼の受託者は、彼の創造物の統一、地球の完全性、その動植物、野生生物と自然環境を維持する責任がある。統一は不和からはもたらされない、またあるニーズを他のニーズに優先したり、一方のみを優勢にすることからは実現できない。それはバランスと調和によって維持される。

したがって、統一、信頼、責任、つまりタウヒード (tawheed)、ハリファ (khalifa)、アクロー (akhroh) は、イスラムの3つの中心的な概念であり、イスラムの環境倫理の柱でもある。それらはコーランによって教えられた基本的な価値観を構成する。イスラム教の預言者ムハンマドが次のような言葉で価値観を表した。「木を植えて、それが成熟して実を結ぶまで熱心に世話をする人は誰でも報われる」、「イスラム教徒が木を植え、畑に種を蒔き、人や獣や鳥はそれらを食することはすべて彼の慈悲である。」、そして再び、「世界は緑で美しく、神はあなたを財産管理人として任命した。

イスラム教の宣言においても、キリスト教と同様に万物が唯一神の創造物であることを明言しているとともに人間の役割は財産管理人であるとしている。

しかし、キリスト教の宣言と比較したときに、イスラム教においてみられる一つの特徴は、人間が天使以上にも、また獣以下にもなりうるという可変性、人間が善悪両方の資質を有していることについて警鐘をこめて言及していることである。実はこの人間の可変性は後述のユダヤ教の宣言にもみられることに注目できる。

加えて、神は人を含む万物統一の存在であるとし、人と万物との一体化した概念を示し、その中における人の万物を調和するという責任を述べていることである。神と万物との間には、創造主と被創造物との関係はあっても、神と人と自然は疎隔なく結ばれたものとしていることが特徴として見える。

イスラム教におけるこの神と人と自然との一体感を示す自然観については、前記『諸宗教の倫理学第5巻、環境の倫理』の中で、モニカ・トゥヴォルシュカは、「コーランが人間と自然を切り離すことを拒否することによってイスラム教は宇宙を統合する視点を守った」[クレッカー、トゥヴォルシュカ 1999(1986): 82] として、人と自然が神の統一の中にある存在であると

の特徴を述べている。

また、人間の役割についても、「人間は、自然を支配するが、人間が神の受託者であり、神の意志の遂行者であるがゆえにのみ、その力が彼に帰属するのである。人間は、その支配に際して、自然に対する神の関与を決して忘れてはならない。なぜなら人間は、神と自然とをつなぐリンクとして二つの領域に属しているからである」〔クレッカー、トゥヴォルシュカ 1999: 82〕と、人間の財産管理人としての立場と、その立場においても神の存在が優先するという原理を強く意識する必要性を述べている。

トゥヴォルシュカは、「総括」として、「人間は環境に対して自由な使用権があるにもかかわらず、最終的にはすべてのものの源泉である創造主に帰着するのであるから、イスラム教の環境倫理学は、人間中心的な側面があるにしても、総じて神中心的と言える。イスラム教に基づいた環境保護によって大地を守るのは、それ自身のためではなく、神の戒めを尊重することからである。人間と大地は、神の被造物として一なるものを形成し、人間が自分に委ねられた創造物に対し、かりそめの用役権限（コーラン 234）を持つとしても、両者は神に従属しているのである。〔クレッカー、トゥヴォルシュカ 1999: 85-86〕と、イスラム教における神と人と自然との関係をまとめている。

また、日本におけるイスラム研究者として知られる塩尻和子も「イスラーム神学では（中略）天地自然の創造や、その秩序がすべて全能の神の徴であり、神の存在証明であり、同時に被造物に対する神の恩恵であると教えられるのである」〔伊勢国際宗教フォーラム 2021: 12〕と、自然界は神そのものの姿を象徴しているとして、イスラム教における神と被造物すなわち人や自然との一元性を明らかにしている。

また、塩尻は、イスラムも環境倫理の出発点かつ帰着点は、ムハンマド自らが、率先して木を植え、水を大切にしたという伝承にあるとし、「人間も森羅万象も神によって創られたものであり、路傍の草ひとつにも、神の徴が現れていると考えることの大切さをクルアーンは私たちに論しているように思われる」〔溝口・ワイスバード編 2006: 189〕として、万物を神のあらわれとみるイスラムの考え方を述べている。

この神中心思想は、キリスト教におけるこの世における人間中心の思想、行動へと一時も軸がぶれることがない、イスラムの根本原理を示している

ように思われる。その意味からすれば、イスラム思想と自然環境破壊を結び付けることは適切ではないといえよう。

ただし、現実には、イスラム圏は、どちらかと言えば発展途上国が多く属しており、西洋の近代化に追いつこうとする過程で、それが優先するがゆえに、環境汚染にたいする意識が希薄であったこと、ゆえに環境破壊を推進してきた近代であることも事実のようである

英国バーミンガムに拠点をおくイスラム教の環境保全運動を進める非営利団体 Islamic Foundation for Ecology & Environmental Sciences（生態学および環境科学に関するイスラム財団）を今日まで 25 年間以上にわたって主宰し、イスラム教における環境保全主義者として夙に知られるファツラン・カリッド (Fazlun Khalid) は、「非宗教的な思想がイスラム世界に勢いよく侵入し、産業発展、経済指標および大量消費主義が社会の中心的パラメータとなるなか、人間社会と自然界との聖なる繋がりを神聖なものとして理解するイスラム教的考え方が薄れていった」[Khalid2019: 149] とのべている。

こうした反省からも、アッシジ宣言には、“最低な獣よりも低く沈む可能性”があるとの自戒と、文言としては表現されていないが、現実には環境破壊を容認してしまっているとの反省にたって、イスラム圏においても環境保全運動は、教義に即した重要な課題であるとの認識と決意が表明されていることをうかがわせる。

(5) 自然に関するユダヤ教徒宣言 (The Jewish Declaration on Nature)

アッシジ会議におけるユダヤ教を代表する宣言は、1936 年設立のユダヤ教を代表する最大の世界組織 World Jewish Congress（世界ユダヤ人協議会）の副会長、ラビ・アーサー・ヘルツバーグ によって発表された。

神が世界を創造されたとき、彼は原始的なカオスから秩序を作ったことを聖書は私たちに告げている。太陽、月、星、植物、動物、そして最終的には人間が、それぞれ宇宙の最も相応しくかつ必要な場所で造られた。彼らはお互いに境界を侵すことを意図されてはいない。「神の教えであり、高きところより明かされたトーラー (Torah) でさえ、一定の尺度で与えられた。」 (Vayikra Rabbah 15: 2) そしてこれらの聖

なる言葉でさえ、あらかじめ定められた限界を超えて拡張してはならない。

(中略)

神の戒めへの最高の従順は、単なる受け入れではなく、神との結合の中でそれらを守ることである。人と神とのこのような喜びに満ちた出会いの中で、世界の正義が確保される。したがって、自然界における神と人間との交わりは、ユダヤ教では、人間が自然界のリーダーであり管理者 (custodian) として縫い目のない網のようにつながる存在として考えられている。

聖書の伝統の中心には、力と管理の問題をめぐる、創造そのものの物語に埋め込まれた一つの緊張がある。世界は神が望まれたゆえに創造された、しかしなぜ神はそれを望んだのか。ユダヤ教は、そのすべてのバージョンで、この世界は神が人間のために創造された場であると主張してきた。半分は獣、半分は天使である人間が道徳的な存在として振る舞うことができることを自ら証明するための場としてである。聖書は、道徳の法則によって、神ご自身でさえ、人間と同じくらい拘束されることを要求した。

(中略)

人間は自然に対する支配権を与えられたが、彼は正義と思いやりをもって残りの創造物に向かって行動するように命じられた。人は常に自分の力と、良心によって決められた限界との間の緊張の中で生きている。

(中略)

私たちには、自分の罪だけでなく他の人の罪に対しても、人生のあらゆる場所でそれを守る責任がある。私たちは皆、同じ壊れやすく輝かしいこの世界の乗客である。この手漕艇を守ろう、そして一緒に漕いでゆこう。

ユダヤ教の宣言文は、聖典とする旧約聖書の創世記にある“人間による支配”についてそれがあくまでも自然界の管理者であることを強調し、人間は、神からの生きとし生けるものの管理者としての命に従うことができるかどうかは、清濁両方の性質を持ち合わせた人間次第であるとしている。

この点は、イスラム教の宣言にも似た人間の性質の持つ危うさへの懸念が読み取れ、キリスト教の宣言文に比べて、現実世界における人間の弱さをも見据えた宣言文のように受け止められる。

リチャード・ワイスバードとアヴィ・ランダウは、『環境と宗教』の中で、確かに旧約聖書創世記の第1章第26節、28節を見れば「人間は自然の上に立つものであり、自由に使う権利があるとしてユダヤ教徒やキリスト教徒らによって、西洋世界による過酷な生態系の破壊を頂点とする搾取行動の正当化に利用されてきた」[溝口・ワイスバード編 2006: 205] が、その一方で、ユダヤ聖典であるタルムードやマイモニデスといった口承律法の物語を読めば、人間が無謀に地球を破壊することを許されていないことは明らかであるとして次のような聖句をあげている。

「神はアダムにこういった。我が造ったものを見よ。いかに喜ばしく良きものであることか。私の創造物はすべてお前のために作ったのである。我が世界を汚し、破壊しないように気をつけよ。もしそのようなことがあれば、誰も修理しないのだから。」(タルムード: ミドラシュコヘレット ラバ第7章13節)

「すべての生きとし生けるものが人間の存在のためにあると考えてはならない。それどころか他のすべての生き物もそれぞれのために意図された存在であり、他の何者のためでもないのである」(マイモニデス 『悩めるもののための手引き』、456節)[溝口・ワイスバード編 2006: 206]

これらをみれば、ユダヤ教の一般信徒間においては、環境保全の思想が一貫して流れていると言えるのかも知れない。また、ユダヤ人は流浪の民としてイスラエル建国までは、ヨーロッパ各地を移動、また各地に分散し続けた中で、人種差別によってキリスト教が中心となる国々においては、すべての職業組合から締め出され、当時のキリスト教会が信徒に禁止していた金融業に向かうしかなかった歴史[石田 1980: 282]があり、その環境下ゆえに土地の管理、自然環境保全の課題に直面することが少なかった経緯もあるのかも知れない。

とはいえ、上記ワイスバードやランダウは、ユダヤ・キリスト教社会が産業革命とその後の近代化の発展を促し、生態系の破壊につながったとして

おり、その意味を含め、また、現代社会において世界の各方面で活躍するユダヤ人の民族宗教としてのユダヤ教が自然環境保全に関する声明を発したことは重要であると言える。

4. アッシジ会議後の多宗教間の連携

世界人類が直面する最大の課題の一つである環境保全問題について、世界の宗教界はどのように関わろうとしているのかという研究テーマの第一歩として、世界のいわば5大宗教がWWFの主催で、初めてこのテーマで集ったアッシジ会議の内容と各宗教の宣言文の概要をみた。

この会議を契機として、その後バハイ教（1987年）、シク教（1989年）、ジャイナ教（1991年）、道教（1995年）がこのWWF宗教ネットワークに参加し、1995年に英国ウインザー城で宗教と環境保全に関するサミット（Summit on Religions and Conservation）が開催され、その折、世界宗教環境保全同盟（ARC）の発会となり、ARCのその後2019年までの活動につながった。

ARCには、1995年の発足以降、上記の宗教に加えてゾロアスター教、儒教、神道も加わり最終的には12宗教による世界的ネットワークとなった。2013年には伊勢神宮とその神苑を会場に国際会議も開催された。

また、学术界に目を向けると、ARC発会直後の1996年には、サミットに参加した前記タッカーが中心となって、ハーバード大学世界宗教センター（Harvard Center for the Study of World Religion）において、「世界の宗教と生態学に関する会議シリーズ」（Conference Series on World Religion and Ecology）が1996年から1998年まで3年間に渡って開催され、1997年には神道をテーマにした会議も開催されている。タッカーらは、その後1998年から、イエール大学内に「宗教と生態学に関するイエールフォーラム」（Yale Forum on Religion and Ecology）を設立、現在では、世界中の一万人を超える宗教者、学識経験者らを含む国際ネットワークとして会議、出版、Website等をおして活発な活動を展開している。

また、各国政府を代表する国連に目を向けると、2008年の国連総会における「宗教間および異文化間の対話、平和のための理解および協力の推進」

(Promotion of interreligious and intercultural dialogue, understanding and cooperation for peace) 決議を受けて、国連環境計画 (UNEP) 内に地球のための宗教イニシアティブ (Faith for Earth Initiative) が生まれ、同イニシアティブは、その使命として「持続可能な開発目標の達成と 2030 年アジェンダの成就にむけて、あらゆるレベルで、パートナーとして宗教に基づく組織を鼓舞し、力を添え、関与する」と謳っている。

世界人類の 8 割が何等かの宗教ないし信仰を持つと言われるなか、こうした宗教界による、または宗教界と共同した環境保全運動の動きは、各宗教のメンバーすなわち大衆への教化力の強さという意味からもますます重要性を増すと思われる。

その意味からも、宗教界の協働による環境保全運動の嚆矢となったアッシジ会議開催の意義は大きいと思われ、原点を知る意味からも今回その内容を振り返った。

世界の宗教界による環境保全運動が本格的に進展するのは、実際には 1995 年の ARC の発会后とも言えることから、次なるテーマとしては、ARC の発会およびその後の各宗教による具体的環境保全運動の中身についてさらに研究を進めたい。

註

- (1) 2003 年 1 月 7 日付けのパーマー氏から著者宛のメールに「from the three faith based environment projects that existed in 1985 to over a million today」とある。
- (2) 2022 年 1 月 7 日付けパーマー氏から著者宛のメールを翻訳。このメール返信に先立ち、2021 年 12 月 24 日付けで、パーマー氏にアッシジ会議に関する開催までの苦勞と会議の意義についてメールで問い合わせた。
- (3) 2021 年 7 月 9 日マイケル・シャックルトン氏との Zoom 面談取材より。

参考文献

- 石田友雄 1980 世界宗教史叢書 4 『ユダヤ教史』山川出版社。
- 伊勢国際宗教フォーラム『第 12 回年次大会、第 13 回年次大会記録集』2012 伊勢国際宗教フォーラム。
- 教皇フランシスコ 2016 『回勅ラウダート・シ』カトリック中央協議会。
- クレッカー, M. トゥヴォルシュカ, U 編 1999 『諸宗教の倫理学 第 5 巻 環境の倫理』石橋孝明、榎津重喜、山口友友訳、九州大学出版会。
- 塩尻和子 2008 『イスラームの人間観・世界観』筑波大学出版会。

世界宗教百科事典編集委員会編 2012 『世界宗教百科事典』 丸善出版。

田村光三 1997 「「地の支配」(dominium terrae) 考—工業化・環境破壊・キリスト教
(1)」『政経論叢』 65(3・4): 477-518.

溝口次夫、ワイスバード、リチャード編 2006 『環境と宗教』 環境新聞社。

Alliance of Religions and Conservation 2022 *ARC News and Features: Interview with Prince Philip*. (<http://www.arcworld.org>, 2022.1.26)

Edwards, Joe, and Palmer, Martin 1997 *Holy Ground: The Guide to Faith and Ecology*. U.K.: Pilkington Press.

Grim, John, and Tucker, Evelyn 2014 *Ecology and Religion*. Washinton/Covelo/London: Island Press.

Khalid, Fazlun M. 2019 *Sings on the Earth: Islam, Modernity and Climate Crisis*. U.K.: Kube Publishing Ltd.

Palmer, Martin, Nash, Anne, and Hattingh, Ivan 1987 *Faith and Nature: Our Relationship with the Natural World Explored through Sacred Literature*. U.K.: Century London.

Spring, David and Spring, Eileen (eds.) 1974 *Ecology and Religion in History*. New York: Harper Torch Books.

UNEP Parliament of the World's Religions 2010 *Faith for Earth: A Call for Action*. Augusta, Maine U.S.A: J. S. McCarthy Printers.